



Circular Challenge Week
サーキュラー
チャレンジ ウィーク
in 薩摩川内

2026.2/11 WED. 12 THU. 13 FRI
@SSプラザせんだい

〒895-0012 鹿児島県薩摩川内市平佐1丁目18

イベントの詳細や
体験フェア・フォーラム
の参加のお申込みは
コチラをチェック!

サーキュラーエコノミーを楽しく学ぶ3日間

薩摩川内
SDGsチャレンジ

つん

開催報告書

薩摩川内市

■目次

1. 「Circular Challenge Week in 薩摩川内」開催概要

(Day1 ぐるっとサステナ体験フェア！)

2 バラシンピック

3 「先行事例を学ぶ」講演会

4 市民体験コーナー

5 ブース展示

(Day2 サーキュラー都市フォーラム)

7 講演会／午前の部【10：00～12：00】

8 講演会／午後の部【13：00～15：05】

1. 「Circular Challenge Week in 薩摩川内」開催概要

○開催目的

- (1) 市民とともに学び行動に繋げるサステナブルな暮らしの実践と中期的スパンでのシビックプライドの醸成に繋げる。
- (2) 2030年SDGs達成、2050年カーボンニュートラル達成のための循環経済都市実現。
- (3) 本市が有する「ブランド価値※」や本市のモデルを国内外の企業、大学、自治体および研究機関等に戦略的・効果的に広く発信する。
- (4) 日本、台湾の産官学の多様なキーマンが、本市に一堂に会し、サーキュラーエコノミーを軸に経済交流の促進を図り、ネットワーク形成と共創を加速する。

※本市のブランド価値

- ①サーキュラーパーク九州構想の独自性や希少性
- ②本市の強みや特徴である地域連携の体制・仕組みを活かした市民参画の取り組み
- ③川内港臨海ゾーンの地理的優位性
- ④国内最大級のAIデータセンター立地を見据えた経済波及効果 等

○開催内容

【Day1】 資源循環工場の見学ツアーや体験ワークショップ、国内の先進事例の紹介など、市民や市民事業者に向けた体験・体験型イベントを開催する。

【Day2】 日本、台湾の産業、行政、学術、金融等の各業界で活躍する多様な有識者が一堂に会し、循環経済（サーキュラーエコノミー）を軸に、将来ビジョンや戦略、最先端技術、取組などの様々なテーマについて講演を行う。

○運営形態

Day1 2026年2月11日（水・祝）

ぐるっとサステナ体験フェア！

会場：SSプラザせんだい／サーキュラーパーク九州

主催：薩摩川内市

運営：ソニーネットワークコミュニケーションズ（株）

参加者：450（延べ参加者数）人

Day2 2026年2月12日（木）

サーキュラー都市フォーラム～循環がつなぐ、新たな価値共創とビジネスのかたち～

会場：SSプラザせんだい

主催：薩摩川内市

共催：一般社団法人九州経済連合会、サーキュラーパーク九州(株)、鹿児島大学

運営：ソニーネットワークコミュニケーションズ(株)

参加者：約300人（うちオンライン視聴者数約10人）

○Day 1 ぐるっとサステナ体験フェア！

2 バラシンピック

実施概要	「バラす（分解）ことを知れば“ものづくり”が見えてくる。」という考えのもと、市内大学・高校等の3人1組のチーム対抗戦で廃棄機器をバラして、タカラ（資源）を取り出し、対話を通じて資源循環の学びを深める取り組みを実施した。製品を実際に分解し、素材の構造やその行方を理解しながら、動脈産業と静脈産業をつなぐ資源循環を五感で学ぶ体験型イベントを行った。本イベントでは、デスクトップパソコンの分解と競技後の対話を通じて、リサイクルを“処理”としてではなく、“価値を生み直す営み”として捉え直し、分別や再資源化を楽しみながら考える場を提供した。
日時	2026年2月11日（水・祝）10：00～12：00
場所	SSプラザせんだい 多目的ホール
提供者	株式会社浜田
参加チーム	ポリテクカレッジ川内、鹿児島県立川内商工高等学校、鹿児島県立川薩清修館高等学校
参加者数	36名（うち参加者15名）

バラシンピック会場の様子



3 「先進事例を学ぶ」講演会【14：00～17：00】

司会進行：山本 珠緒氏

	時間	セッション名	所属	登壇者名（敬称略）
1	14：00～ 14：05	オープニング ビデオ		
2	14：05～ 14：10	主催者挨拶	薩摩川内市 市長	田中 良二
3	14：10～ 14：20	薩摩川内市の 取り組み	薩摩川内市未来政策部企画政策課	中俣 哲男
4	14：20～ 14：35	先行事例企業 ①	株式会社 ECOMMIT 上席取締役役員 CCO	坂野 晶
5	14：35～ 14：50	埼玉県の 取り組み	埼玉県産業労働部産業創造課 環境部資源循環推進課	豊田 貴志 飯島 秀明
6	14：50～ 15：05	先行事例企業 ②	日本シーム株式会社 営業本部ソリューショングループ マネージャー	鈴木 大輔
7	15：05～ 15：20	先行事例企業 ③	埼玉県産業技術総合センター北部研究所 材料・機械技術担当 担当部長	奥野 慎
	15：25～ 15：35	休憩		
8	15：35～ 15：50	蒲郡市の 取り組み	愛知県蒲郡市企画部企画政策課 サーキュラーシティ推進室	杉浦 太律
9	15：50～ 16：05	先行事例企業 ④	愛知プラスチック工業株式会社 代表取締役社長	大竹 永悦
10	16：05～ 16：20	先行事例企業 ⑤	サンローズ株式会社 代表取締役社長	榊原 功二
11	16：20～ 16：35	先行事例企業 ⑥	一般社団法人大崎町 SDGs 推進協議会	向井 侯太
12	16：35～ 16：50	先行事例企業 ⑦	若潮酒造株式会社 取締役	上村 曜介
	16：50～ 16：55	質疑応答	一般社団法人大崎町 SDGs 推進協議会へ企業版ふるさと納税を利用した実証実験に関する質問と応答	
	16：55～ 17：00	クロージング	薩摩川内市未来政策部 部長	下門 隆嗣

3-1. オープニングビデオ

循環の息づくまち薩摩川内市



サーキュラー都市の実現に向けて
薩摩川内市のこれまでの歩み、サーキュラー都市を目指す背景、
現在行っている取り組みや、将来構想をアニメーションで紹介。

3-2. 主催者あいさつ

薩摩川内市 市長 田中 良二



本市は「未来創生 SDGs・カーボンニュートラル宣言」や「SDGs 未来都市」選定
を契機として、市民総ぐるみで持続可能なまちづくりを推進している。
「九州・台湾クリエイティブカンファレンス」や首相官邸での車座対話等を通
じて、本市の取り組みと将来像を国内外へ発信してきた。「人と経済が循環する
まち」、すなわち「サーキュラー都市・薩摩川内市」の実現を目指す。サーキュ
ラーパーク九州構想やAI データセンター準備法人の設立を追い風とし、産業集
積及び交流人口の創出を通じた地域経済の活性化へつなげていく。

3-3. 薩摩川内市の取り組み

薩摩川内市 未来政策部 企画政策課長 中俣 哲男

サーキュラー都市・薩摩川内市の取り組み紹介



冒頭で本市概要を説明。近年の主な経済トピックとしてサーキュラーパーク九
州構想、川内港臨海ゾーン整備、国内最大級のAI データセンター開設に向けた
準備法人の設立等がある。本市がサーキュラー都市を目指す背景として令和4
年に国の「SDGs 未来都市」に選定されたことがあり、令和5年「九州・台湾ク
リエイティブウイーク in 薩摩川内」を開催するなど、取り組んできている。
人口減少、カーボンニュートラルといった課題に対応し、持続可能な地域づく
りを目指す。循環経済に対する市民の理解を深め、市の成長戦略につなげた
い。

3-4. 先行事例企業①

株式会社 ECOMMIT (エコミット)

上席執行役員 COO (Chief Circularity Officer/最高循環責任者) 坂野 晶氏

資源循環のインフラ構築



「すべての必要とすべての不要をつなげ捨てない社会をかなえる」を掲げ、再資源化に向けた様々な取り組みを自治体や企業と協働する。不要品を回収・選別し、リユース・リサイクルへつなぐ循環インフラの一例として、PASSTO を紹介。生活者の身近な場所に回収拠点を設け、捨てる以外の選択肢を日常化する仕組みで、衣類を中心に高い循環率を実現している。アパレル分野では、店頭回収から選別、再流通、データ可視化までを一体で支援し、環境負荷の低減と企業価値向上を両立するサーキュラーエコノミーの実装を推進する。日常の行動変容と企業の仕組みづくりを結びつけることが重要である。

3-5. 埼玉県の取り組み

埼玉県産業労働部 産業創造課 豊田 貴志氏 (リモート)

埼玉県環境部 資源循環推進課 飯島 秀明氏

埼玉県のサーキュラーエコノミー (循環経済) の取組



飯島 英明氏

埼玉県では、大野元裕知事の強い推進のもと、サーキュラーエコノミーへの転換を進めている。企業が世界的な経済構造の変化に対応し、中長期的な競争力を確保するうえでも、その推進は重要な政策課題と位置づけられている。具体例として、規格外のサツマイモと米麴を活用した「芋みつ」の製造では、原材料の提供、技術支援、製造、販売・卸までを地域内で完結させる体制を構築しており、行政、商工団体、研究機関が連携するモデルとなっている。普及啓発活動では、埼玉スタジアム 2002 を活用し、浦和レッズ等と連携した実証実験を実施。ペットボトルの分別回収とマグカップ化、食品ロスの肥料化、その肥料で育てた野菜を使ったスタジアムグルメの開発販売、選手による啓発動画の発信などを通じて、資源循環を身近に感じられる取り組みを展開している。

3-6. 先行事例企業②

日本シーム株式会社 営業本部ソリューショングループ マネージャー 鈴木 大輔氏

日本シームの考える環境への取り組み



「マシンテクノロジーで地球を豊かにする」を掲げ、廃プラスチックの再資源化設備の開発・提供を主軸に、循環経済の中でも「リサイクル」を担う。リサイクルの高効率化、品質の安定化、環境負荷の低減を独自の技術力で実現している。こうした事業活動に加え、CSRの一環として埼玉県庁オープンデー等に出展し、ペットボトルキャップを使ったアップサイクル体験などを通じて、資源循環を楽しく学べる環境教育にも取り組んでいる。事業と普及啓発の両面から、持続可能な社会の実現に貢献していく。※体験コーナーに出展。

3-7. 先行事例企業③

埼玉県産業技術総合センター北部研究所 材料・機械技術担当 担当部長 奥野 慎氏

規格外「川越いも」を活用した地域循環経済の取り組み～川越紅赤芋みつの誕生～



規格外の川越いもと米麴を活用した「芋みつ」の開発を通じて、食のサーキュラーエコノミーの実践を進めている。生産者、行政、商工団体、加工事業者、販売者を地域内で結び、原料調達から製造・販売までを小さなエリアで完結させる地域循環モデルを構築した。農作物の循環経済を事業化するポイントとして、消費地（観光地）が近くにあることや、規格外品の提供者にもメリットがあること等を挙げた。規格外農産物に新たな付加価値を与え、持続可能な地域経済につなげる先進事例となった。※出展ブースにて同製品の試飲会を実施。

3-8. 蒲郡市の取り組み

蒲郡市 企画政策課 サークュラーシティ推進室 杉浦 太律氏

官民が共創するサーキュラーシティ



令和3年「サーキュラーシティ」を目指すことを表明し、経済・社会・環境を一体で進めるまちづくりを推進。ビジョン策定、アクションプラン、実証実験、コンソーシアム設立へと段階的に取り組みを進め、市民・事業者・行政が連携した社会実装を重ねてきた。使用済衣類回収、紙おむつ再生利用、粗大ごみリユース、廃材のアップサイクルなど多様な実証を通じて地域課題の解決と新たな価値創出を両立させる「官民共創のサーキュラーシティ」モデルとして発展させ、「蒲郡に関わるすべての人たちのウェルビーイングへ」つなげたい。

3-9. 先行事例企業④

愛知プラスチック工業株式会社 代表取締役社長 大竹 永悦氏

サーキュラーエコノミーを切り口とした地域連携、企業連携、社内エンゲージメント向上



海洋プラスチック問題やレジ袋有料化など、業界を取り巻く逆風の中で、サーキュラーエコノミーへの関心を強めてきた。社名の「愛知プラスチック」が将来「愛知マイナスチックス」になりかねないという危機感があった。蒲郡市のサーキュラーシティアクションプラン策定ワークショップに参加し、概念や具体事例に触れ、交流も広がった。2024年からは、愛知県主催の「あいちサーキュラーエコノミー推進プロジェクト」に参画。サーキュラーエコノミーを実際のビジネスとして実装する取り組みを進める。具体例として、中部国際空港におけるプラスチック循環の一環として、ANAと協働した再生ポリ袋の製造を紹介。こうした実践を通じて、地域自治体と地元企業が密接に連携することで、はじめてサーキュラーエコノミーは成り立つことを説明した。

3-10. 先行事例企業⑤

サンローズ株式会社 代表取締役社長 榊原 功二氏

繊維の町で発生するハギレ生地で市民が作るアップサイクルドレス



カーテンメーカーとしての責任から、縫製工場で日々発生する大量の端切れ生地の有効活用に取り組む。工場では年間40トン超のハギレが生じる。大きな生地は店頭販売商品として活用し、細かな生地も反毛や再生繊維、建材ボードなどへ再利用している。異素材が混在し再利用が難しかったレース端切れを活用したアップサイクルにも挑戦。SNSでアイデアを募り、端切れからウェディングドレスを制作するプロジェクトが始動した。地元ホテルとも連携しながら、廃棄物を極力出さないサーキュラーウェディングの提案へと発展している。かつてはタブー（再生素材を結婚式で使用する）だったことが、若年層には好感を持って受け入れられている。

これらの取り組みを通じて、他社の廃棄生地から日よけシェードの製品化にも成功している。事業活動に発想の転換を加味して、資源循環を新たな価値創出へつなげたい。※体験コーナー、出展ブースにも出展。

3-11. 先行事例企業⑥

一般社団法人 大崎町 SDGs 推進協議会 向井 侯太氏

リサイクルの町から世界の未来をつくる町へ



大崎町 SDGs 推進協議会は、リサイクル率83%超を誇る大崎町の強みを生かし、「サーキュラービレッジ大崎町」構想のもと、循環の仕組みを地域内にとどめず国内外へ広げる取り組みを進めている。中でも「ALL COMPOST PROJECT」は、大崎リサイクルシステムの中核である生ごみ堆肥化の技術を他地域へ展開するもので、国立環境研究所との共同研究により、堆肥化を行う大崎町の仕組みはGHG排出量が38.5%低いことが確認されたことを背景にしている。実証先として長崎県対馬市、静岡県西伊豆町を採択し、大崎町役場やそおりサイクルセンターが技術協力を行い、LINEヤフーの寄附も活用しながら展開している。企業版ふるさと納税を通じ、町全体を実証の舞台として開きながら、脱炭素と資源循環のモデルを広げている。

3-1 2. 先行事例企業⑦

若潮酒造株式会社 取締役 上村 曜介氏

若潮酒造の取り組み紹介



若潮酒造では、人口減少や販売量の減少を受け、従来の「町の人のための酒造り」から一歩進み、地域とより深く関わりながら、内外の人々に地域の魅力を届ける酒造りへと挑戦している。その代表例が大隅半島の規格外フルーツや野菜を活用した新たな酒づくりである。志布志市職員やイチゴ農家との対話がきっかけとなって生まれた。芋焼酎づくりで培った技術を生かし、規格外農産物に新たな価値を与えることで、フードロス削減と地域活性化の両立を目指している。今では農家側から原料提供のオファーをいただくまでになった。SDGs 慈善活動ではなく、事業モデルの進化として取り組みを進めている。地域資源を見直し、新たな需要へとつなげる取り組みを通じて、酒造りを核とした新しい地域との関わり方を築いていく。※展示ブースに該当製品を展示。

4 市民体験コーナー

4-1. 食品ロス削減を意識した料理教室

実施概要	SHIROYAMA HOTEL kagoshima の徳重総料理長による、“もったいない”を“感動”に変えるサステナブル料理教室を実施。フードロス削減とSDGsをテーマに、規格外野菜等を用いて、スープやパエリアの作り方をデモンストレーションした。参加者も実際に調理と試食を行った。
日時	2026年2月11日（水・祝）①10：00～12：00、②14：00～16：00
場所	SSプラザせんだい 103多目的室
提供者	SHIROYAMA HOTEL kagoshima
参加者数	57人

料理教室の様子



4-2. カーテンハギレを使ったバッグ制作教室

実施概要	色も素材も様々なカーテンのハギレを使用し、ミシンを使ったオリジナルトートバッグづくりを実施。参加者は好きなハギレを選んでトートバッグを制作した。オリジナル缶バッジづくりも併せて実施した。
日時	2026年2月11日(水・祝) 10:00~15:50(全5回)
場所	SSプラザせんだい 201・202 会議室
提供者	サンローズ株式会社
参加者数	50人

トートバッグづくりの様子



4-3. ペットボトルキャップからコマを作るアップサイクル体験

実施概要	<p>日本シーム株式会社は、昭和 52 年創業の企業であり、廃プラスチックを再生するまでの中間工程を担う機械の開発・製造や、リサイクルプラントのプロデュースを行っている。</p> <p>本イベントでは、同社の技術や役割を分かりやすく伝えるため、ペットボトルのキャップ等の使用済みプラスチックを原料に、来場者がオリジナルのコマを作成する体験型プログラムを実施した。体験を通じて、身近な廃プラスチックが新たな製品へと生まれ変わる過程を実感でき、資源循環の仕組みへの理解促進や分別・リサイクルに対する意識向上につながった。</p> <p>併せて、ペットボトル素材からリサイクルされたコースターやカラビナを展示し、再生素材が実際の製品として社会で活用されている具体例を示すことで、リサイクル産業における中間工程の重要性や循環型社会の実現に向けた理解を深める機会となった。</p>
日時	2026年2月11日（水・祝）10：00～16：00
場所	SSプラザせんだい 305 会議室
提供者	日本シーム株式会社
参加者数	50 人

コマづくり・再生素材展示の様子



4-4. 不要品の衣服等の回収

実施概要	<p>株式会社 ECOMMIT は、薩摩川内市発のスタートアップ企業であり、循環型社会の実現に向けたインフラ・システム開発をはじめ、リユース・リサイクル事業を展開している。</p> <p>本イベントでは、同社が運営する不要品回収ボックス「PASSTO BOX」を設置し、来場者から不要となった衣料品の回収を実施した。併せて、これまでに回収された衣料品の展示を行い、使用済み衣料が廃棄されることなく次の利用につながっていることを可視化することで、資源循環の実態への理解促進を図った。</p> <p>また、リユース品の無償回収を実施し、回収品のうち、おもちゃ及び子供用靴については譲渡会を行った。これにより、リユースによる資源の有効活用を来場者が具体的に体感するとともに、身近な行動が循環型社会の形成につながることへの気づきを促す機会となった。</p>
日時	2026年2月11日（水・祝）10：00～16：00
場所	SSプラザせんだい 1階エントランス
提供者	株式会社 ECOMMIT
参加者数	30人

リユース体験・譲渡会の様子



4-5. 感動体験！サーキュラーパーク九州見学ツアー

実施概要	<p>サーキュラーパーク九州構想やサーキュラーエコノミーについて、楽しみながら理解を深めることを目的に、体験型の学習バスツアーを実施した。ツアーでは、再資源化に関する実際の取組や施設を見学することで、資源が循環する仕組みを具体的に学ぶ機会を提供し、参加者の理解促進につなげた。</p> <p>併せて、鹿児島県内では初となる常設展示「Warp Square」の体験を行い、デジタル技術を活用した没入型の演出を通じて、循環型社会の概念や未来像を直感的に体感できる内容とした。これにより、サーキュラーエコノミーを身近で分かりやすいテーマとして捉えるきっかけとなり、日常行動への意識づけや関心を高める機会となった。</p>
日時	<p>2026年2月11日（水・祝）</p> <p>①9：30 出発～12：30 着、②13：30 出発～16：30 着</p> <p>2026年2月13日（金）</p> <p>③9：30 出発～12：30 着</p>
場所	<p>SSプラザせんだい集合・解散</p> <p>サーキュラーパーク九州株式会社</p>
提供者	サーキュラーパーク九州株式会社
参加者数	1日目57人、3日目32人、合計89人



CPQ



CPQ

鹿児島大学
サテライトラボ



CPQ
タービン建屋



工場見学



Warp Square
映像体験



Warp Square
体験

5 ブース展示

5-1. 埼玉県

概要	講演（先行事例企業③）に関連し、「川越紅赤芋みつ」製品展示、芋みつの試飲等
展示場所	101 会議室

5-2. 蒲郡市

概要	講演（先行事例企業⑤）に関連し、アップサイクルのウェディングドレス等を展示
展示場所	104 会議室

5-3. 大崎町

概要	講演（先行事例企業⑦）に関連し、規格外野菜等をつかったスピリッツ類を展示
展示場所	102 会議室

展示ブースの様子



埼玉県



蒲郡市



大崎町（志布志市）

○Day2 サークュラー都市フォーラム

6 講演会／午前の部【10：00～12：00】

司会進行：山本 珠緒氏

	時間	セッション名	所属	登壇者名（敬称略）
1	10：00～ 10：10	オープニング ビデオ		
2	10：10～ 10：15	開会あいさつ	薩摩川内市 市長	田中 良二
3	10：15～ 10：20	あいさつ	経済産業省九州経済産業局 局長	星野 光明
4	10：20～ 10：25	あいさつ	九州経済連合会 会長	池辺 和弘
5	10：25～ 10：35	あいさつ	スタンフォード大学 創薬医療機器開発研究所 所長	西村 俊彦
6	10：35～ 10：50	講演 （リモート）	経済産業省 資源循環経済課 課長	三牧 純一郎
7	10：50～ 11：05	講演	鹿児島県 商工労働水産部長 部長	北村 貴志
8	11：05～ 11：20	講演	国立大学法人鹿児島大学 南九州・南西諸島域イノベーション センター長、教授	藤枝 繁
9	11：20～ 11：35	講演	CDIB CAPITAL GROUP（台湾） Special Advisor	Michel Chu
10	11：35～ 11：50	講演	薩摩川内市 副市長	古川 英利

6-1. オープニングビデオ

循環が息づくまち薩摩川内市



サーキュラー都市の実現に向けて
薩摩川内市のこれまでの歩み、サーキュラー都市を目指す背景、
現在行っている取り組みや、将来構想をアニメーションで紹介。

6-2. 開会のあいさつ

薩摩川内市 市長 田中 良二



「サーキュラー都市・薩摩川内市」の実現に向け、資源循環を軸とした市民参加、産業集積、国内外との経済交流を一体的に推進していく。サーキュラーパーク九州構想に加えて国内最大級のAIデータセンター立地を見据え、地域経済への波及効果にも大きな期待が寄せられている。本フォーラムにおいては、市民とともに学び行動へつなげ、国内外への戦略的発信、産官学金の連携による共創を加速させ、循環経済都市の構築に向けて、将来の方向性を示すものである。今回の覚書締結を新たな一歩とし、強い意志で未来を切り拓いていく。

6-3. あいさつ

経済産業省九州経済産業局 局長 星野 光明氏



地政学リスクの高まりを背景に、政府はGX2040ビジョンのもと、エネルギー安定供給、経済成長、脱炭素の同時実現を目指し、GX戦略地域制度の創設や資源有効利用促進法の改正などを進めている。そうした中、薩摩川内市において九州電力㈱が火力発電所跡地を活用し、資源循環と脱炭素の拠点としてサーキュラーパーク九州㈱を整備し、市民や地域企業とともに幅広い資源循環に取り組んでいることに深い敬意を示したい。AIデータセンター構想を含め、国の動きに先んじた先進的な挑戦が評価され、本フォーラムを契機に「薩摩川内モデル」が全国へ広がることを期待している。九州経済産業局としても資源循環システムの構築や技術開発、設備投資、データセンター集積に対し、できる限り支援していく。

6-4. あいさつ

一般社団法人九州経済連合会 会長 池辺 和弘氏



気候変動や資源制約が深刻化する中、サーキュラーエコノミーへの転換は、従来型の経済構造を見直し、資源を循環させながら新たな価値を生み出す重要な潮流だ。これは環境対策にとどまらず、地域産業や暮らし方を変革し、持続可能で強靱な地域経済を形づくる取り組みでもある。とりわけ九州は、再生可能エネルギーや多様な農林水産資源、地域コミュニティの力を備え、循環型社会の先進地域になる可能性を持つ。薩摩川内を中心とした南九州の取り組みは、産学官金が連携しながら資源循環を地域産業として根づかせようとする先進的な実践だ。こうした動きが九州全体の発展につながり、九州から全国、さらにはアジアへと広がる新たな循環型モデルの創出に結びつくことが期待される。

6-5. あいさつ

スタンフォード大学 創薬医療機器開発研究所 所長 西村 俊彦氏

宣言から実装へ：薩摩川内市が示した地域創生モデル

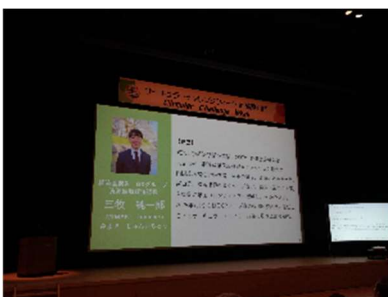


世界が急速に変化し、AIの進化によって社会の構造転換が迫る中、薩摩川内市と九州が進めてきた挑戦は、極めて先進的で大きな意義を持つ。資源循環やSDGsの推進にとどまらず、AIデータ、次世代産業まで見据え、未来に向けた基盤づくりを着実に進めてきた点が高く評価される。とりわけ、早い段階から方向性を示し、先頭に立って行動してきた薩摩川内市の姿勢は、地域の可能性を切り拓くものだ。今後はスピード、正確な情報、挑戦を恐れない姿勢がさらに重要となる。世界の先進事例や知見を柔軟に取り込み、地域の力で発展させることが、これからの競争力につながる。台湾との連携や今回の協定締結は、薩摩川内市と九州が世界と直接つながる重要な一歩。AI基盤やデータセンター整備を通じて、新たな産業や地域変革の可能性を広げる象徴的な成果である。

6-6. 講演（リモート）

経済産業省資源循環経済課 課長 三牧 純一郎氏

日本が目指すCE（サーキュラーエコノミー）



サーキュラーエコノミーは、従来の3Rをさらに発展させ、資源を循環させながら新たな価値を生み出す考え方である。これまで環境対策や企業の社会的責任として捉えられてきたが、世界的な資源需要の増加や環境制約の高まりを受け、いまや企業活動を支える重要な経営課題となった。海外市場では環境配慮や資源循環への対応が、企業評価や競争力に直結している。国内で再生材を確保し循環型の仕組みを整えることは、日本の産業基盤を守るうえでも重要だ。経済産業省では、産官学等の連携促進、設備投資や事業開発支援、制度整備を通じて、循環型ビジネスの実装を後押しする。薩摩川内市で進められている高度な分別回収や再生材活用の取り組みは、地域全体で持続可能な循環型ビジネ

6-7. 講演

鹿児島県 商工労働水産部長 北村 貴志氏

かごしま未来創造ビジョンとGXについて



県内外、さらには国外からも多くの参加者を迎える本イベントに、大きな意義を感じている。鹿児島県がサーキュラーエコノミーやGXに取り組む背景には、SDGsの推進やカーボンニュートラルの実現に加え、県内産業の持続的発展に向けた構造転換の必要性がある。食品関連産業をはじめとする既存の強みに加え、半導体、モビリティ、ヘルスケア、情報通信など成長分野の振興を進め、企業の「稼ぐ力」を高めていくことが重要である。薩摩川内市を中心に進むAIデータセンター関連の動きは、脱炭素電源と産業集積を一体で進める先進的な取組であり、新たな産業立地と地域経済の発展につながる大きな可能性を有している。ここで得られる知見や成果を県全体へ広げ、鹿児島県の産業振興と持続的成長につなげていきたい考えである。

6-8. 講演

国立大学法人鹿児島大学 南九州・南西諸島域イノベーションセンター長 教授 藤枝 繁氏

海ごみを回収する時代は終わった ～鹿児島大学におけるサーキュラーエコノミーに関する取組～



鹿児島の海ごみ問題は、社会的関心が高まる以前の1990年代後半から深刻化していた。特に養殖用いけすの発泡スチロール製フロートが砕けて微細なプラスチック片となり、海岸や海面に広がっていることは大きな課題であった。現地調査を通じて実態を明らかにし、清掃活動や回収・処理の仕組みづくり、資材の耐久性向上に取り組んだ結果、鹿児島湾の漂着ごみは大きく減少した。

「拾う」だけでは限界がある。薩摩川内市からの提案を契機に実証事業に取り組むこととなった。現在、鹿児島大学、九州電力㈱、サーキュラーパーク九州㈱、薩摩川内市と連携し、ナイロンの酵素分解や化学的分解を活用した複合素材の再資源化実証を進めている。「拾う」から「ごみを生まない・循環させる」への転換を目指し、循環型社会の実現に向けた新たな挑戦と連携を広げていく。

6-9. 講演

CDIB CAPITAL GROUP (台湾) Special Advisor Michel Chu 氏

台湾における半導体ビジネス動向



AI時代を支えるのはソフトウェアだけでなく、半導体やAIサーバー、電力、冷却、通信といったハードウェア基盤である。現在、その中核を担っているのが台湾であり、AI半導体やサーバー供給において世界的に圧倒的な存在感を示している。一方で、台湾は電力・人材・土地不足という制約を抱えており、今後さらなる成長を遂げるためには日本との連携が不可欠である。

中でも、台湾に近く、産業基盤やインフラ面で優位性を有する鹿児島は、AIデータセンターの集積地として大きな可能性を持つ地域である。台湾の高度な技術力、日本の安定したインフラ、そして薩摩川内市の挑戦する意欲を結びつけることで、鹿児島を起点とする新たなAIエコシステムを形成し、日本と台湾、双方の未来につながる成長モデルを築いていきたい。

6-10. 講演

薩摩川内市 副市長 古川 英利氏

サーキュラー都市・薩摩川内市（現状と今後の方向性）



サーキュラー都市とは、単なるごみのリサイクルにとどまらず、廃棄物を資源として循環させる産業構造、実証・教育・研究、さらには都市機能全体の循環設計までを含む総合的な都市経営戦略である。薩摩川内市では、持続可能な成長と市民のウェルビーイングを実現する中核政策としてこれを位置づけ、少子高齢化や縮小経済、SDGs、カーボンニュートラルといった課題を乗り越えながら、循環経済産業都市の確立を目指している。川内火力発電所跡地や川内港、エネルギー産業都市としての基盤に加え、多くの事業者や地域と連携した実践が着実に広がっている点も大きな強みである。中でもAIデータセンターの立地は、既存インフラを生かし、GX、デジタル、脱炭素を一体で進める象徴的な挑戦であり、サーキュラー都市を具体化する中核プロジェクトといえる。海外パートナーとの連携も追い風となる中、変化を恐れず挑戦を重ね、薩摩川内市から国内外へ広がる新たな循環型都市の実現を目指していく。

7 講演会／午後の部【13：00～15：05】

	時間	セッション名	所属	登壇者名（敬称略）
1	12：50～ 13：00	オープニング ビデオ		
2	13：00～ 13：10	講演	サーキュラーパーク九州株式会社 代表取締役	春木 優
3	13：10～ 13：20	講演	城山観光株式会社 SHIROYAMA HOTEL kagoshima 代表取締役社長	矢野 隆一
4	13：20～ 13：35	講演	九州電力株式会社 ビジネスソリューション統括本部 地域共生本部(環境) 副長 株式会社 GREENER 代表取締役	上田 倫太 三根 進也
5	13：35～ 13：45	講演	東レ株式会社 常任理事 経営企画室 担当 マーケティング企画室長 株式会社エコログ・リサイクリン グ・ジャパン 代表取締役	平井 正夫 和田 顕男
6	13：45～ 13：55	講演	株式会社キューヘン 代表取締役社長	藤本 淳一
7	13：55～ 14：05	講演	大成建設株式会社 サステナビリティ経営推進本部 地域連携推進部 地域連携推進室長	重見 聡一
	14：05～ 14：20	休憩	(※進行の都合により短縮)	
8	14：20～ 14：35	講演	CDIB CAPITAL Managing Director カインデジタルインフラストラク チャー株式会社 共同代表	Daniel Tsou 小坂 幸太郎
9	14：35～ 14：50	講演	ソニーネットワークコミュニケーシ ョンズ株式会社 執行役員 副社長	永井 直紀
10	14：50～ 15：05	講演	SG ホールディングス株式会社 事業推進担当部長	角本 高章

7-1. オープニングビデオ

- ・薩摩川内市市勢 PR 動画
- ・「捨てているのは、ゴミなのか。未来なのか」 編

7-2. 講演

サーキュラーパーク九州株式会社 代表取締役 春木 優氏

CPQ ロードマップと今後の事業展開



九州電力川内火力発電所跡地を活用し、資源循環の拠点として設立されたサーキュラーパーク九州(株)は、一般・産業廃棄物の収集、分別、再資源化を進め、新たな循環型産業の創出を目指す。事業の柱は廃棄物を高度に再資源化する「リソーシング事業」と、資源化が難しい分野で技術開発や仕組みづくりを進める「ソリューション事業」。特に太陽光パネル、半導体といった今後の社会課題に対し、回収・保管・再資源化の体制づくりを急ぐ。従来「捨てるしかなかったもの」に新たな循環の可能性を見だし、社会課題の解決と新たなビジネス創出を両立したい。AI データセンター整備を次の大きな展開と位置づけ、GPU のリユースや関連産業の集積も含めた循環型産業エコシステムを構築したい。薩摩川内から九州、さらに国内外へ広がる新たな循環モデルの形成を狙う。

7-3. 講演

城山観光株式会社 SHIROYAMA HOTEL kagoshima 代表取締役社長 矢野 隆一氏

SHIROYAMA HOTEL kagoshima の資源循環の取り組み



ホテル運営で生じる廃棄物やエネルギー消費に正面から向き合い、資源循環の取り組みを進めている。環境・社会・人権をサステナビリティの柱に据え、食品ロス、廃プラスチック、CO2 排出削減など、業界特有の課題に対して具体的な対策を積み重ねてきた。2024 年にはサーキュラーパーク九州(株)と連携し、客室改装で発生した備品や食器類の再資源化を進めるとともに、「3010 運動」、料理の持ち帰り、売れ残りパンの子ども食堂への寄付、ビール酵母や麦かすの飼料化、食品残さの堆肥化など、多面的な循環の仕組みを実践。さらに、カーボンニュートラル都市ガスや再エネ活用、太陽光発電、ワンウェイプラスチック削減、アクリル板の再利用などを通じて環境負荷低減にも取り組む。こうした現場発の実践は高く評価され、日本ホテル協会の表彰でも継続的に高い評価を受けている。今後も地域社会とともに持続可能なホテル運営を目指していく。

7-4. 講演

九州電力株式会社 ビジネスソリューション統括本部 地域共生本部（環境）副長 上田 倫太郎氏

株式会社 GREENER 代表取締役 三根 進也氏

太陽光パネルのリユース・リサイクルに向けた仕組みの構築について



上田氏：FIT 制度により普及した太陽光パネルは、2030 年代半ば以降に大量廃棄期を迎え、最大で年間 50 万トン規模の排出が見込まれる。処分コストの増大や最終処分場の逼迫、有害物質リスク等が懸念される中、回収から再資源化までを見据えた体制整備が急務である。特に九州は導入量が多く、多様な事業者が保有するため、一企業ではなく地域全体で取り組むべき課題。2024 年、九州電力グループや AGC など 7 社が包括連携協定を締結した。撤去、運搬、リユース判定、リサイクルまでを一体で進める「九州モデル」の構築を目指す。

上田 倫太郎氏



三根氏：太陽光パネルの廃棄問題において、一番の課題は「情報不足によって回収・リユース・リサイクルの流れが十分につながっていない」点にある。そこで、発電所の所在地、パネルの仕様、撤去時期、処理事業者の条件などを事前に集約・管理する情報プラットフォームを構築し、適正かつ効率的な処理体制を整える必要がある。まずは九州で排出量の予測と廃棄時の把握に取り組み、情報集約の実装を進め、将来的には他地域へ展開したい。設置から再資源化までを可視化することで、不法投棄防止と資源循環の実現につなげていく。

三根 進也氏

7-5. 講演

東レ株式会社 常任理事 経営企画室担当 マーケティング企画室長 平井 正夫氏

東レの繊維リサイクルと「&+」について



東レでは、資源循環を前提とした繊維リサイクルを重要なテーマと位置づけ、環境負荷低減と持続可能なものづくりの両立を目指している。繊維リサイクルには、原料に近い状態まで戻す「ケミカルリサイクル」と、洗浄・再熔融によって再利用する「マテリアルリサイクル」がある。後者はより現実的かつ実践的な取り組みとして進めている。※社内プロジェクトとして、回収したペットボトルを繊維へと再生し、白無垢へと活用した事例を動画で紹介。実現には異物を丁寧に除去し、高い品質を保つことが不可欠である。単なる廃棄物削減にとどまらず、使い終わった素材を新たな価値として社会に戻す循環型ものづくりを通じて、資源循環を当たり前にする社会の実現に貢献していきたい。

株式会社エコログ・リサイクリング・ジャパン 代表取締役社長 和田 顕男氏

マテリアルリサイクルによる企業ユニフォームの循環を目指して



マテリアルリサイクルの手法を用い、不要となった企業制服を回収し、再び製品化する取り組みを進めている。自社プラントでは、回収したポリエステル製のユニフォームを仕分けし、付属品を外したうえで洗浄・乾燥・細断し、最終的に再生ペレットへと加工して新たな製品原料として活用している。薩摩川内市での実証では、県内企業の使用済み制服を再資源化し、企業ロゴ入りポロシャツとして生まれ変わらせ、再び従業員の制服として活用する循環の仕組みづくりに取り組んだ。制服を単なる廃棄物ではなく、次の価値ある資源として生かすことで、環境負荷の低減と資源循環意識の向上につなげるものである。

7-6. 講演

株式会社キューヘン 代表取締役社長 藤本 淳一氏

変圧器における資源循環の取り組み



変圧器メーカーとして長年培ってきた技術を生かし、使用済み変圧器を単なる廃棄物で終わらせず、資源として循環させるモデルづくりを進めている。変圧器は銅や鉄、アルミ、絶縁油などで構成され、従来は撤去後に部品ごとに処理されるのが一般的であったが、現在は九州電力グループと連携し、使用済み変圧器を集約して内部の絶縁油を回収・再生し、新油同等の品質まで戻して再利用する仕組みを構築している。さらに、本体もサーキュラーパーク九州(株)で分解・洗浄・再整備し、新たな変圧器部材として活用している。環境性と経済性の両立を図りながら、今後は銅のクローズドリサイクルや植物由来絶縁油への対応も進め、産学官連携のもと変圧器の完全リサイクル実現を目指す。

7-7. 講演

大成建設株式会社 サステナビリティ経営推進本部 地域連携推進部 地域連携推進室長 重見 聡一氏

大成建設の地域連携と資源循環の取り組みについて



2030年に向けた経営計画の中で、地域に根差した中長期の共創活動を新たなビジネスモデルとして位置づけ、地域課題の解決を事業化へつなげる取り組みを進めている。石垣市では漂着プラスチックのアップサイクル、輪島市では震災がれきや漁網の再利用に取り組み、高校生や地域住民とともに資源循環を通じた新たな価値づくりを实践。静岡市清水区や雲仙市でも、地域課題に応じた実証を展開している。さらに、サーキュラーパーク九州(株)と連携し、解体工事で生じる鉄スクラップのトレーサビリティ確立と再利用の仕組みづくりにも着手している。資源循環とデジタル技術を組み合わせることで、地域との新たな関係を築きながら、脱炭素化と次世代の競争力強化につなげていきたい。

7-8. 講演

CDIB CAPITAL Managing Director Daniel Tsou 氏

カインデジタルインフラストラクチャー株式会社 共同代表 小坂 幸太郎氏

次世代 AI データセンターの事業構想



ダニエル氏：鹿児島県、薩摩川内市、サーキュラーパーク九州(株)、九州電力(株)の支援により、CPQ 敷地内に建設が予定されている AI データセンタープロジェクトは着実に前進している。多くの顧客が関心を寄せていることから、本プロジェクトは、今後さらにスピード感を持って進んでいく見通しである。

ダニエル氏 (右)



小坂 幸太郎氏

小坂氏：本日締結した 5 者による覚書を基盤に、川内火力発電所跡地を活用した大規模 AI データセンターの整備を進め、将来的には 1 ギガワット級のデータセンタークラスター形成を目指す。これは発電設備跡地を新たな産業基盤へ転換する取り組みであり、サーキュラーエコノミーを体現する挑戦でもある。AI データセンターは、主にデータの保管や配信を担うクラウド型とは異なり、大量の電力と計算資源を投入して新たな情報価値を生み出す「情報の工場」だ。将来的にフィジカル AI の時代を支え、製造、物流、半導体設計、建設、農業など幅広い分野での高度化や省人化につながる可能性を持つ。豊富な電力、川内港の物流機能、地域の産業基盤という強みを生かし、南九州全体の産業競争力を高める起爆剤として、鹿児島から新たな産業エコシステムを広げていく。

7-9. 講演

ソニーネットワークコミュニケーションズ株式会社 執行役員 副社長 永井 直紀氏

次世代 AI データセンターのネットワーク及び NURO 光エリア拡大



ソニーグループの一員として、通信とネットワークの分野を担い、個人向けの光回線サービス、法人向けにはネットワーク接続、VPN、クラウド接続、専用回線などを提供し、社会や産業を支える基盤づくりに取り組んでいる。AI の進展により、通信インフラには「つながる」だけでなく、「止まらない」「安全」「信頼」といった価値がこれまで以上に求められており、AI 時代を支える重要な基盤としてその役割はさらに大きくなる。ソニーグループ全体では、「クリエイティビティとテクノロジーの力で世界を感動で満たす」というパーパスのもと、AI を新しい表現や体験を生み出す技術として活用する。アバター生成技術や 3D 映像制作支援など、映像・ゲーム・バーチャル空間の分野で新たな価値を創出しており、通信インフラを担う立場として、こうした技術や創造性を支えながら、鹿児島をはじめ地域から世界へ、新しい価値と感動を広げていく。

7-10. 講演

SG ホールディングス株式会社 事業推進担当部長 角本 高章氏

次世代 AI データセンターの物流網と SDGs の枠組み検討



個人的な話になるが、30年にわたり物流の現場に携わり、鹿児島営業所責任者時代には県内各地や離島まで担当する中で、鹿児島という土地に魅了され、地域との縁を深めてきた。佐川急便を中核とする企業グループとして、国内外の物流を一気通貫で担う強みを持つ一方、環境負荷の大きい産業であることも強く認識し、循環型物流「サーキュラーロジスティクス」の実装にも力を入れている。鹿児島県とは、物流、防災、施設移転など多様な分野で連携しており、移転時に発生する什器類のリユース・リサイクルも実践してきた。2025年にはサーキュラーパーク九州㈱と協定を結び、全国物流網と資源循環ノウハウを組み合わせた循環型物流モデルづくりを進めている。さらに台湾企業との連携による半導体・電子機器輸送の強みも生かし、今回のAIデータセンター構想に伴う新たな物流需要を、回収・再資源化まで含めた形で支え、鹿児島・九州の経済発展に貢献していきたい。

(参考) フォーラム開催の様子



受付



受付



受付



会場



会場



会場